

大木 隆生

東京慈恵会医科大学
血管外科教授



既成概念にとらわれない意識改革で 母校の外科医局を再建 トキメキを追い求める

「現代版ブラック・ジャック」の挑戦は続く

血管外科分野の世界的名医である大木隆生氏は、米国での破格の待遇を捨てて2006年に帰国し、

苦境に喘いでいた母校・東京慈恵会医科大学外科学教授、さらに重症患者の最後の砦となつて手術に臨む一方で、志ある外科医を育て続けている。

医師・研究者・教育者として第一線に立ち続ける大木氏に、今日までの歩みと、あるべき医師の姿、そして日本の医療現場の課題について聞いた。

外科医を目指す原点にあつた ブラック・ジャックへの憧れ

伊藤 大木隆生先生は血管外科の名医として世界に

知られるとともに、東京慈恵会医科大学外科学教授、さら

に外科の統括責任者として、極めてご多忙の日々を

過ごしていらっしゃいます。まずは先生が外科医になられた理由からお聞かせいただけますか。

大木 それはもう、極めてシンプルなんです。僕は

子どもの時から、何となく人生に疑問を持っていま

した。哲学者ではないですが、人は何のために生ま

れ、何のために死んでいくのかとか、学校の勉強に何の意味があるのかとか。大げさに言うと落ちこぼれで、決して優等生ではなかつたです。自分の人生の目標が分からぬままに過ごしていました。ス

ポーツや釣りは大好きで、友だちと遊ぶのは楽し

かつたのですが、学校に通つて勉強をすることに対

して非常に疑問がありました。だから勉強好きの友だちのことが不思議でした。

僕は商社マンだった父親の仕事の関係で小学校1

年から中学2年までの8年間をイギリスとベルギー

で過ごしたので、英語とフランス語はネイティブ並

みに話せました。帰国後に入学した中学校は英語と

フランス語を教えていたので、クラスメイトが困っていたのです。僕は両方とも得意だったんで手伝つてあげると、とても喜ばれました。その時に、人に喜ばれることはいいなと思ったのです。それで先生に、人に喜ばれる職業は何かと尋ねたら、「医者が一番いいんじゃないか」と。それを聞いて「分かりました。僕、医者になります」と即決しました。その時から勉強に対する姿勢も変わりましたね。

伊藤 医師の中でも、明確に外科医を目指された時期はいつ頃ですか。

大木 医学部受験を決めた高校生の頃に外科系医師と決め、左手でお箸を使うなどのトレーニングすら

フランス語を教えていたので、クラスメイトが困っていたのです。僕は両方とも得意だったんで手伝つてあげると、とても喜ばれました。その時に、人に喜ばれることはいいなと思ったのです。それで先生に、人に喜ばれる職業は何かと尋ねたら、「医者が一番いいんじゃないか」と。それを聞いて「分かりました。僕、医者になります」と即決しました。その時から勉強に対する姿勢も変わりましたね。

「患者は亡くなつたが、これをもつて失敗だつたとは言い切れない。ここに僕の医療の一つの本質があります」。大木教授は医療の不確実性から逃げず、リスクを厭うことなく、パッションを持って勇気ある医療を実践し、患者の心に光を与え続けている。

「一日に幾度も手術着に着替えるので、カツターシャツのボタンは一つおきにかけていい」。使命感あるまなざしでそう語るのは、大木隆生慈恵医大教授。今も年間300件以上の手術をこなし、その治療の最終ゴールを、患者の満足度に置いている。16年前にNHKの『プロフェッショナル 仕事の流儀』が治療現場に密着。80代の女性が大動脈疾患の手術を受ける場面があつたのだが、患者は他病院で手術困難と告げられていつ破裂するか分からず、大動脈瘤を抱え絶望の淵にあつた。その患者の心に教授は寄り添い、「手術はできます。一緒に頑張りましょう」と優しく話しかける。だが、願いはかなはず手術後に死亡。ディレクターは振り直しを提案したが、「手術がいつもうまくいくわけじゃない。成功例だけを取り上げることでさらに医療の安全神話が加速する。事実を知つてもらうことも必要」との大木教授の言葉でそのまま放棄に。異例の結果が大きな反響を呼んだ。後日、その家族が大学を訪ねて、「手術室に向かう時、母は笑顔でした。絶望していた母の人生の最後に笑顔と希望を与えてくれた」と感謝された。

「患者は亡くなつたが、これをもつて失敗だつたとは言い切れない。ここに僕の医療の一つの本質があります」。大木教授は医療の不確実性から逃げず、リスクを厭うことなく、パッションを持って勇気ある医療を実践し、患者の心に光を与え続けている。

伊藤 大木隆生先生は血管外科の名医として世界に知られるとともに、東京慈恵会医科大学外科学教授、さら

に外科の統括責任者として、極めてご多忙の日々を

過ごしていらっしゃいます。まずは先生が外科医になられた理由からお聞かせいただけますか。

大木 それはもう、極めてシンプルなんです。僕は

子どもの時から、何となく人生に疑問を持っていま

した。哲学者ではないですが、人は何のために生ま

れ、何のために死んでいくのかとか、学校の勉強に何の意味があるのかとか。大げさに言うと落ちこぼれで、決して優等生ではなかつたです。自分の人生の目標が分からぬままに過ごしていました。ス

ポーツや釣りは大好きで、友だちと遊ぶのは楽し

かつたのですが、学校に通つて勉強をすることに対

して非常に疑問がありました。だから勉強好きの友だちのことが不思議でした。

僕は商社マンだった父親の仕事の関係で小学校1

年から中学2年までの8年間をイギリスとベルギー

で過ごしたので、英語とフランス語はネイティブ並

みに話せました。帰国後に入学した中学校は英語と